

+ 5 【まるのみおんな】

村をうろつく女乞食（おんなこじき）のことを、村の大人たちは、【ひきずりおんな】と呼んでいました。

【ひきずりおんな】には赤ん坊がいて、小山で乳をのませているのをぼくは見たことがありました。

でもそれは乳ではなくて、村の大人たちにいわせると、自分の二の腕を切ってその血をのませているとのこと。

ぼくはなんだか【ひきずりおんな】に同情して、山羊の乳を盗んで小山までもっていったことがあります。

その【ひきずりおんな】の仲間があらわれたというので、様子を見にいこうとしたら、懐爺にとめられました。

「あのひとは単なる【ひきずりおんな】ではなくて、【ひきずりおんなの】姉貴分（あねきぶん）【まるのみおんな】ですよ」

懐爺はいいました。

「あねきぶんたあ、おやぶんみたいなもんかい」

「はい。【ひきずりおんな】はまだおばけになっていませんが、【まるのみおんな】は立派なおばけです。【まるのみおんな】は丸々と太っている女乞食だから、一目でわかるので、決して近づかないよう」

「ちかづいたらどうなるんじゃ」

ぼくはききました。

「【まるのみおんな】に、まるのみされてしまいます。もっとも、わたしなんかをぜったいまるのみしない。美少年だけが大好きなんですよ」

「びしょうねんたあなんじゃ」

美少年なんて言葉は、村ではきいたことがありません。

「金ちゃんみたいなきれいな男の子のことですよ。完ちゃんは大丈夫でしょう」

ほめられたのかどうかはわからないまでも、まるのみされやすいということだけはわかりました。

「じゃあ、かんちゃんにみにいってもらおうかのう」

「やめたほうがいいですよ。最近【まるのみおんな】も目が悪くなって、美少年とそうでない子との区別（くべつ）がつかないかもしれませ

ん」

「じゃあ、かいじいもあぶないのう」

「わたしは臭いから大丈夫でしょう。【まるのみおんな】は自分が臭いの
に、臭い人が嫌いなんです」

それでもぼくはどうしても【まるのみおんな】を見たくてたまりませ
ん。

そっとのぞき見するくらいなら問題ないだろうと、完ちゃんを誘（さ
そ）って小山に行きました。

いたいた、いました。

【ひきずりおんな】に肩をもませている太った老女が、【まるのみおんな】
にちがいありません。

ぼくはしばしみとれていました。

母親が祖母の介護（かいご）をしているふうにおもわれたのです。

ところが【まるのみおんな】は介護をされるほど弱いおばけではあり
ません。

ぼくたちを見つけると、丸々太ったからだをころがしてきました。

あまりに急だったので、ぼくたちは逃げも隠れもできません。

【まるのみおんな】はどういうわけか、ためらわずに、美少年ではない
完ちゃんを餌食にしました。

ぺろぺろべろべろ

べろだしちょんま

ごくりんごくりん

ごくつぶし

まるまるまるるん

まるのみうまや

その口の巨大なこと、完ちゃんは頭から吸い込まれ最後に足が消えま
した。

完ちゃんは叫ぶまもなく、まるのみされたのでした。

【まるのみおんな】を見た直後にぼくは緊張のあまりおならがでて、そ
の臭いでぼくだけ助かったのかもしれない。

げっぷをしている【まるのみおんな】に、ぼくはおそろおそろこうききました。

「かんちゃんはどうなるんかのう」

【まるのみおんな】はこういいました。

「わいのおなかのなかでそだてまする」

「うそつけ。はらのなかでとかすんじゃろ」

「わいはこじきだがうそはつきませぬ」

「なんねんそだてるんじゃ」

「まだこどもだからおとなになるまでそだてまする」

「ほんまかい」

「やくそくしまする」

「かんちゃんのかえをきかせろや」

「あいあいきかせまする」

【まるのみおんな】が大口をひらきます。

のどの奥の奥の方から、たしかに完ちゃんの声。

「金ちゃんしんばいすんな。ここはなかなかよかところじゃ」

「よかところかい」

「金ちゃんのかわりにはいっちまって、わりいなあ」

「そんなによかところかい」

「金ちゃんの顔みられないのはさびしいけど、おとなになったらまた会おうな」

「かんちゃん、かんちゃん」

ぼくは泣き出しました。

「なくなよ金ちゃん、しばしのわかれじゃ」

「かんちゃん、かんちゃん」

「金ちゃん、それまで元気でね、さよなら」

【まるのみおんな】の口が閉ざされ、ぼくと完ちゃんの関係も閉ざされました。

それからちょうど十年。

約束通り【まるのみおんな】から二十歳で吐き出された完ちゃんは、直後映画界に入り、美男子俳優として人気が沸騰しました。

むろん完ちゃんはいまでもぼくの自慢の親友です。